

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2291100077		
法人名	株式会社在宅支援センターふれあい		
事業所名	グループホームふれあい静岡(2ユニット共通)		
所在地	沼津市獅子浜111-1		
自己評価作成日	令和6年 2月 20日	評価結果市町村受理日	令和6年 4月 1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyo-shizuoka.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人静岡県介護福祉士会
所在地	静岡県静岡市葵区駿府町1-70 静岡県総合社会福祉会館4階
訪問調査日	令和6年 3月 6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

【みんな、笑顔でいつもの暮らし】の事業所理念の下、ご利用者様が日々笑顔で暮らすことができるよう、想いに寄り添いご支援させて頂いております。ふれあい静岡では個別支援に力を入れており、カンファレンスを通じてご本人様が何を求めているかを追求し支援に繋げております。施設での生活が、これまで歩んできた【いつもの暮らし】の延長線となるよう、利用者様が中心となり、我々職員がご家族様、地域の方の協力も得ながらサポートをする形を日々意識しております。ここ最近ではICT、IOTの機器の導入も取り入れ、これまでの経験や勘だけでなく、客観的なエビデンスを元に支援に繋げていくことで、更なる生活の質の向上に努めているところです。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今年度後半より、新たな管理者とケアマネジャー、リーダーが着任している。法人理念「敬愛創造 貢献」をもとに、毎日の生活がマンネリ化しないように、利用者一人ひとりに寄添った「個別支援」を提供したいと考えている。ケアワーカーの配置があり、介護職員が余裕を持って利用者に係るために欠かせない存在となっている。コロナ禍が終息を迎え、地域交流や馴染みの関係性、また、職員の働きがいも繋がっている。感染症に関する制限は、法人の方針に沿って適切に運営している。職員同士の関係性は良好で、日々のケアが疎かにならないように協力して業務を遂行している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営理念に紐づいた、介護の約束5か条、仕事の約束5か条は朝礼時に唱和したり、会議の中で一つの言葉の意味や意義を振り返る機会を定期的に図っている。	今年度は月ごとの目標設定はしていないが、支援の様子から運営方針を理解して利用者に関わっていることが窺える。日頃から唱和や振り返りを繰り返すことで理念の意識付けができています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの感染状況を見ながらではあるが、ここ最近では個別での外出も行った、家族との交流も繋がり一つとして、ご家族様に来て頂く動きを図っている。	コロナ禍以降、地域交流も緩和傾向にあるが、直ぐに元の状態に戻すことは難しい。店舗などの地域資源を活用しながら、関係性の回復に努めている。自治会との関係性は継続できている。	地域交流は継続的な課題として、常に意識している。新たな試みよりも慣例としていた交流の再開に向けて、関係性の再構築に繋がる取組みが期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	令和6年度の動きにはなるが、圏域の地域包括支援センターから研修の依頼があり、地域住民に向けた、グループホームという事業形態の理解、認知症支援の関わり方を発信する予定であり準備を進めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	R6年2月度より対面での運営推進会議を再開。直接ご意見を頂戴し、サービス向上に繋げる動きは図れている。	直近の会議では、地域包括支援センター、家族、職員の参加があり、利用者が4人同席している。家族全員への議事録の配布には至っていない。平等な情報提供を踏まえた配布方法を検討する意向を示している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	沼津市の相談員も月に1回訪問され、現状の状況や課題の報告は都度行っている。	市担当課に出向いて運営推進会議の議事録を提出している。介護相談員の役割については、コロナ禍以前の交流について確認を行い、有益な関りとなるように検討する必要性を感じている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化委員会というものを3ヶ月に1回開催し、会議を通じて身体拘束の理解と支援の質(言葉のかけ方等)と合わせ振り返る機会を定期的に作っている。	委員会は全体会議に合わせて開催し、職員はほぼ全員参加している。法人全従業員を対象に、定期的に研修を実施している。委員会での振り返りは、確実に職員の意識付けに繋がっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止の研修を社内研修として年1~2回開催しており、全職員対象となり参加している。当日参加できなかったスタッフには後日フィードバックしどの職種でも知識習得の漏れがないように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現状、後見人制度を活用している方が2名おり、権利擁護について学ぶ機会は少ないが必要時は実施している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は1時間程度の時間をかけ、分かりやすいように言い回し方や表現を変えたりして、伝わるような配慮は行っている。不明な点はいつでも連絡頂けるようにと都度お伝えしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	サービスの質の向上の為のアンケートを毎年実施しており、ご意見、ご要望などの課題があれば早急に対策を講じるような体制を図っている。	年度末の「利用者満足度アンケート」で一人ひとりの思いなどを確認し、内容に応じて対応している。家族への面会状況の周知が不十分であることが判明したため、お便り等で早急に対応する予定である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の満足度調査を年に1回、WEBのアンケートを実施している。書面だと本心を書きにくい方も想定する為、職員名は無記名で意見を取る形を会社として行っている。頂いた意見を参考に会社として向き合っている。	年度末に「職員の満足度調査」も実施している。多くの回答と本音を聞取るために、Webで行っている。前回の要望であった安全や物品については、改善している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	雇用条件は個々によって違うが、休みの日数の確保、連勤が続かないような配慮は管理者としても意識している。また、キャリアパス制度があり、個人的な目標達成度に応じて給与水準が上がる仕組みもある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	会社全体で、研修制度が充実しており、介護未経験の方も入職しやすい業種ではあるので、そういった方には新人研修に参加するなど、その方の役職に応じ細分化した研修に参加を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	未だ対面での催は出来ていないが、沼津市内のグループホーム連絡協議会を通じて他事業所の取り組みを知ったり、意見交換する機会がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談時には、本人、家族が不安に思っている事をお聞きしている。同時にこれまでの生活で大切にしていた時間や物などお聞きし、支援に繋がられるものがあれば繋げている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	基本的には入居前に事業所に見学を頂き、入居のイメージを持っていただけるよう促しており、同時に事業所で出来る事、出来ない事をしっかりお伝えするようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居の相談をする中で、グループホームが対象ではないようなケースにおいては、他サービスの説明を行いながら、他サービスに繋げることもある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の場として、環境をサポートしていく立場なので利用者の間に立ち、関係性を構築する上での仲介を行っている。また、9名という少ない人数でも話しやすい方、そうでない方がおり、席の交換なども定期的に検討している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族様も社会資源の一つとして認識しており、面会、外出などの家族との時間も可能な方は取っていただけるよう働きかけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族との時間や、近所の方との交流を図る時間は面会等通じて確保している。	家族との外出や外泊は、従来通り実施している。遠方の家族とは、希望に応じてオンライン通話での交流を支援している。2か月に1回程度、訪問美容の機会で馴染みの美容師と交流している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	孤立しないよう、職員が間に入り話を展開したり、レクリエーションや体操参加を促したりなど閉じこもりがちの方は個別で関わるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了で関係性の完結とは考えておらず、その後も気軽に相談頂ける環境づくりに努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプランの見直しのタイミング等定期的に思いを伺うことは行っている。カンファレンス時にも思いの共有は図っている。	現在の入居者は意思表示できる人が多く、問いかけで意向の把握を行っている。日常生活の中で聞取った情報をケアチェック表に記録している。モニタリングを経て介護計画に反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアプランの見直しのタイミング等定期的に生活の振り返りを行っている。カンファレンス時に共有を図っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の状態変化はしっかりと申し送りを行い、状況に応じてはケアプランの見直しを図り、その方に合わせたプランを再作成することもある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスはフロア会議にて毎月開催している。職員参加率も高くその中で意見も多く出てくる為、本人として何を望んでいるのかも同時に考える機会をつくり、ケアの方向性を決めている。モニタリングもケアマネだけでなく介護職員の意見も徴収し反映している。	チームで取組む意識があり、丁寧にカンファレンスを行っている。モニタリングの実施と介護計画の作成はケアマネジャーが行っている。介護計画の見直しは、本人の状態に応じて随時行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	iPad上にて個別に記録を残している。毎日の朝夕礼での報告、会議にて意見交換を行っている。ケアマネ自身もポイントで現場支援を行っており情報習得に力を入れている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	生活を支えていく支援を第一に考慮し、課題の緩和や改善のため、連携医療機関や家族を含んだ包括的な支援を意識しています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍以前は地域の小学校や幼稚園などの交流が盛んにあった。現在は、敷地内の散歩や日光浴をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医との連携は密に行えている。24時間オンコール体制、往診も可能。日々入居者様の状況を気にかけてくれ、病院側からも良く連絡を頂いている。	協力医を主治医とする人は、月1回の定期往診を基本とするが、追加往診も可能である。1人は馴染みの主治医を受診しており、家族が付き添っている。情報の提供と共有は、適切に行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が定期的に訪問し、健康状態の把握や処置を行っている。協力医の看護師とは訪問診療時に立ち合いも可能な限りできているので、そこでの話し合いが図れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の情報は素早くお伝えしている。退院前カンファレンスは家族と一緒に同席し、関係作りを築いている。病院にも定期的に事業所の情報誌を持参し訪問することで、日頃からの関係性構築に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化における指針、看取りに関する指針については契約時に確認を取り同意を頂いている。また終末期が近づいた方においては、協力医からも事前に必ず家族宛にICを行い、再度同意書を頂いている。	「重度化と看取りに関する指針」は、入所時に説明している。昨年は数名の看取り支援を行ったが、本人と家族に寄り添う支援ができている。職員の夜間帯の不安には、ベテラン職員がサポートを行い安心感を与えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命講習(AEDの取り扱い・心肺蘇生法)や緊急搬送時の手順の研修を社内で行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を年2回、風水害訓練を年1回行っている。また、土砂災害に関する避難確保計画も定期的に見直しをしている。通報訓練や消火器使用訓練、会社組織でのBCP訓練も行っている。	事業所は津波と土砂災害の危険地域であり、同法人の事業所を避難先としている。情報伝達訓練を年1回実施している。夜間想定訓練の実施については検討の余地がある。	不測の事態を想定し、断水や停電に備えておくことが望まれる。生活用水の確保や発電機等の使用訓練を定期的実施することが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄、入浴時には特にプライバシーの配慮には十分に注意をしている。 言葉かけをしてから支援に入るようにしている。大きな声で排泄の話などしない様に心掛けている。	職員は、利用者に対して尊厳の気持ちを持って言葉かけを行っている。安全確保のために、トイレの扉をほんの少し開けておく場合があるが、居室のドアはきちんと閉めて眠りに配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	問いかけの工夫や言葉かけをし、同意を得てからの支援を心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご本人の今まで培われた生活歴を大切に、ご本人の視点に立った支援を心がけている。ペースとなる時間は決めているが、起床や就寝、日中の臥床時間に関しては意向に合わせている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみとして化粧される方はして頂いたり、服装も自身で選んだりできる方は、自身で選んで頂けるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備、食器洗い、食器拭きなどご本人様ができるところを活かすためにお願いする機会は多々ある。	法人全体で湯煎食を利用している。主なメリットとして、効率の良さや栄養管理ができる点がある。また、環境問題への取組みであるフードロスにも繋がっている。味が薄めでボリュームに欠ける点については、行事食やおやつで補っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	現在は湯煎食材を導入していることもあり、栄養状態やカロリーも把握できている。プラスα捕食が必要な方においては適宜協力医と相談しながら食事を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は必ず口腔ケアを促し、支援が必要な方においては職員が介助で実施している。希望者には協力歯科と契約し、ブラッシングの指導や歯の健康状態の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ご本人の排泄パターンを理解し、適宜言葉かけを行っている。すぐにオムツに切り替えるのではなく、なるべくトイレでの排泄ができるよう職員にも教育している。	利用者のほとんどがトイレで排泄を行っている。職員は、自立支援のスタイルを崩さずに利用者を支援している。声かけのタイミングなどは、一人ひとりのパターンや状況に合わせて行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄に関しては牛乳やヨーグルトなどの乳製品を提供したり、食事でも食物繊維の摂取や水分摂取量や日中の活動量についてなど総合的に意識しながら支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個浴にて入浴支援を週2回は確保できるよう調整している。失禁等で追加に入浴する機会もある。体調面に考慮しながらも、入浴時間においてはご本人の希望に合わせている。	安全を第一に、安心して入浴してもらえるように努めている。清潔に配慮して、浴槽のお湯は常に循環させている。湯温やヒートショックにも配慮している。できる動作は本人に任せて、職員は見守っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	体調に合わせた午睡や静養の支援。褥瘡をつくらぬよう、エアーマットの使用や2時間おきの体位交換を実施している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	持病、現病の把握をし、服用している薬の効能を理解。副作用なども薬情を確認している。薬局との連携も密に行っている。服薬方法や飲み込みについても医師へ相談をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その方の今まで培われた人生、らしさを大事にしている。 一人ではなく、一緒になり取り組むことで達成感の共有をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	庭の草取りや花の水まき、敷地内散歩、洗濯物を干すなどを一緒に行うようにしている。家族様に協力頂きながら外出機会を定期的に図っている利用者様も一定数いる。	事業所の庭は広く、椅子に座って日光浴をしながら季節の花を鑑賞している。年末には近郊の観光施設にイルミネーション鑑賞に出かけている。出入口に面した道路は、見通しが悪く交通量があるため、外出の際には安全面に留意している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が好きな物を自分で選んで購入できるよう家族に理解をいただき、立替金で支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍で電話にてお話をする機会や、手紙でのやりとりは実施している。 字の書ける利用者様は手紙をご自分で書き、難しい利用者様は代筆を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合わせた飾りなどの掲示物をフロアに掲示し季節感を感じて頂く空間づくりや、動線に余計な物を置かない環境、定期的に空気の入替えや季節に応じて加湿器を使用したりなどの温度管理には十分配慮している。	各フロアでは季節感を大切に、年間行事や様々なレクリエーションを楽しんでいる。体操や手伝いを日課に取り入れている。壁には、職員と一緒に制作した春の桜が施されている。清掃、消毒、換気などの感染対策は、継続して行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ご本人の生活リズムに合わせた支援として、自室で休んだり、読書したりする方は促しを行ったり、共用部のフロアで過ごす際は、一緒に脳トレやレクを行ったり、会話がしやすいように職員が間に入るなどの配慮を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には電動ベッド、洗面台、クローゼットなどは備え付けられている。これまで使い慣れた家具や装飾などを持参してくる方も多くいる。	睡眠の質を重視して、「眠りscan」(体動測定センサー)を導入している。また、リネン類の管理を外部委託に変更して家族と職員の負担軽減を図っている。利用者にとっては、「心地よさ」が担保される取組みである。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人の「できる」に着目し、残存能力を活かした支援を提供できるよう常に意識している。役割を持つことで達成感に繋げ、それが最終的に生きる活力に繋げていけるよう配慮している。		